坂出市における海岸線の変遷

香川県埋蔵文化財センター 考古学講座 56
令和２年 11 月８日　森下友子

陸と海の接点である海岸は人間の活動に大きく関わりを持つ舞台であり、自然環境の変化による海面の変化や自然の変化や開発とともにその姿は大きく移り変わってきました。今回は、遺跡の発掘調査成果や、地名調査、絵図、文献資料などから、香川県の中ほどに位置する坂出市における海岸線の変遷について紹介します。

1. はじめに

坂出市の海岸線は江戸時代から昭和にかけて埋め立てや干拓により広がった。特に坂出市では塩作りが盛んにおこなわれ、海岸の大半には塩田が広がっていた。昭和 40 年代になると塩田が廃止され、跡地には住宅や工場が建てられた。ここでは、坂出市の西部、江尻町付近、林田町付近の３地域に分け、現代の海岸の姿とは大きく異なる江戸時代以前の海岸線の変遷をさまざまな資料から探る。

2. 坂出市西部

ここで取り扱う坂出市西部とは昭和 17 年（1942）年以前の坂出町付近で、現在の坂出市御供所町から横津町付近に当たる。

古代から中世

江戸時代末の嘉永３年（1850）に坂出の宮崎栄立が著した『民賊物語』には以下のように戦国時代の坂出市西部の海岸の様子が記されている。「元亀二辛未歳奈良氏宇多津聖通寺山に城を築き累代居城とす城東は入海にして角山の麓まで海潮恒に満干いたせり。角山の麓より三四丁計り沖に出て東西の寄洲三十七八丁ありて、其の東に南北の洲在つて横たわれり、海潮の満たる時、津郷、福江の大道を往来せり、潮の干たる時は海中の洲を諸人共往来せしとなり、遠近の違いあること弓と弦との如し」(1)。元亀２年（1571）に奈良氏が城を築いた宇多津聖通寺山の東には海が入り込んでおり、満潮時は角山の麓まで潮が入っていた。満潮の時は津の郷（現在の宇多津町津の郷）から福江（坂出市福江町）の大道を往来し、干潮の時は海中の中州を往来していた。干満の差が大きく、まるで弓と弦のようであると記されている。このように、戦国時代には聖通寺山の東には干満差の大きな干潟が広がっており、角山の麓から沖に出たところに東西の寄州があったことがうかがわれる。

この寄州とは波や風によって移動した土砂が海岸線に平行して帯状に小高く堆積した浜堤のことである。坂出市街地には東西方向の２列の浜堤がある（図１）。現在の八幡町・白金町・寿町・本町・元町付近と、その南約 600 メートルの富士見町・文京町付近である(2)。『民賊物語』に記された「東西の寄洲」は「角山山麓より沖に出たところ」とあるので、北側の浜堤のことを指しているのであろう。

近年行われた坂出市本町の本町二丁目遺跡や坂出市文京町の文京町二丁目西遺跡の発掘調査によっ

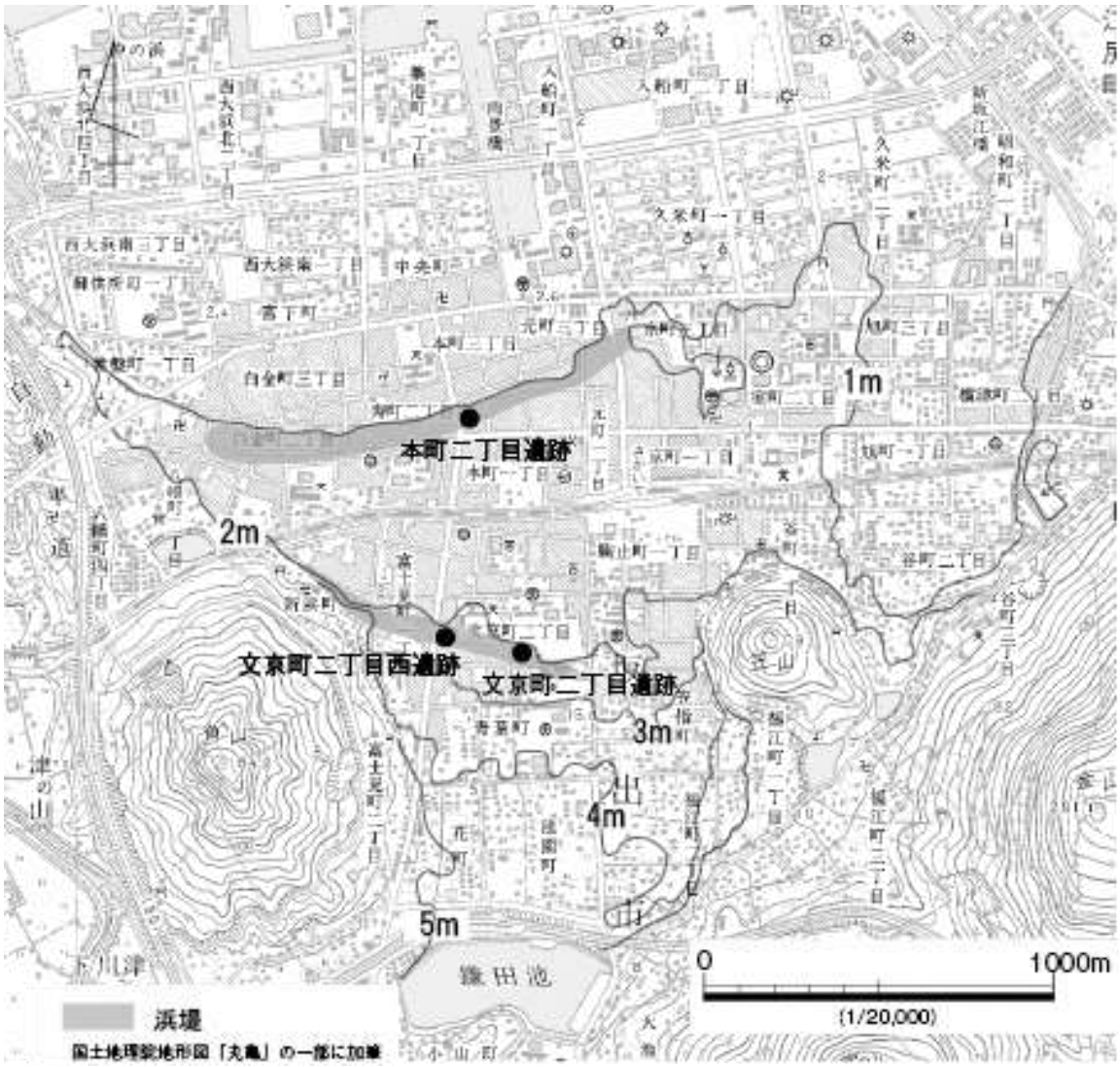

図１　坂出市の遺跡と浜堤

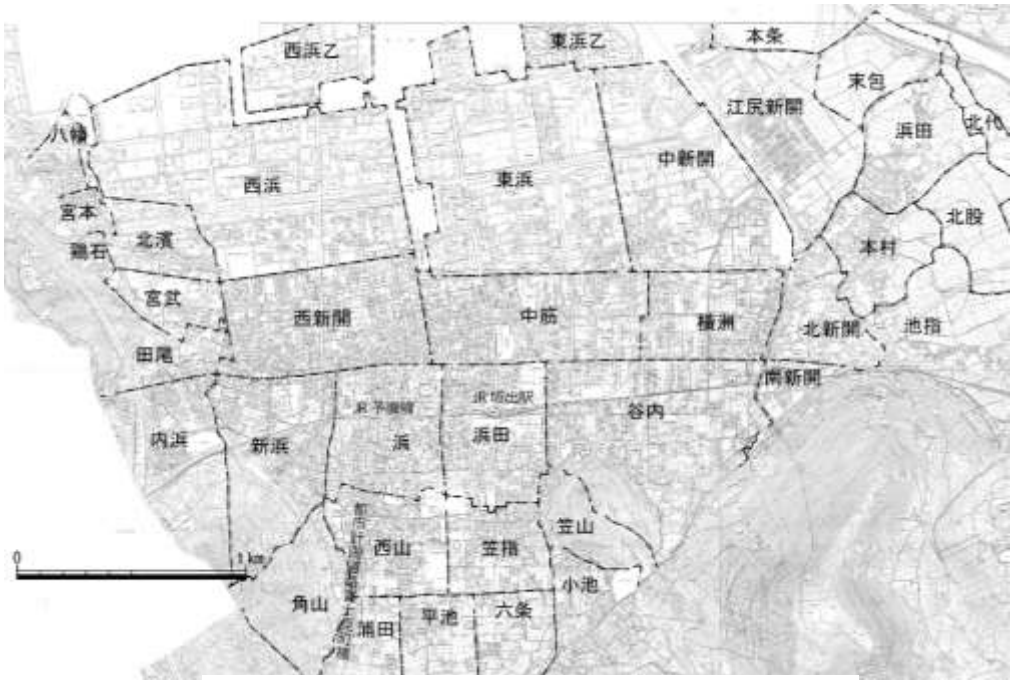

図２　坂出市の小字　　坂出市都市計画図の一部に加筆

てこれらの浜堤の形成時期に関する手がかりが得られた。これらの遺跡の調査で、浜堤を構成する土砂から土器が出土し、出土した土器の年代から、南の浜堤は古代、北の浜堤は室町時代に形成されていたことがわかった。これらの浜堤はかつての海岸線の位置を示している。すなわち、古代の海岸線は南の浜堤付近であったが、室町時代後半には北の浜堤付近に海岸線が後退したのである[(3)]。

この付近の旧地形は小字名にも反映されている。図 2 は坂出市の小字名を地図に示したものである。都市計画道路富士見町線とＪＲ予讃線が交差する付近に「浜」、ＪＲ坂出駅周辺には「浜田」という小字がある。「浜」・「浜田」の南端は南の浜堤付近である。小字の範囲は時代とともに多少移動している可能性もあるが、南の浜堤の北側には中世以降になると浜が広がっていたと考えられる。

江戸時代

19 世紀前半になると、高松藩普請奉行久米通賢によって北側の浜堤の沖の干拓が行われたことはよく知られている。干拓以前の様子は 19 世紀初頭に作成された「高松藩軍用絵図　阿野郡北絵図」（写図　公益財団法人鎌田共済会郷土博物館所蔵）、明治 45 年（1912）に坂出高等小学校の生徒が古老からの聞き取りをもとに描いた「坂出古図」[(4)]、文化 3 年（1806）の通賢による測量を図化した「御内御用測量下図」（公益財団法人　鎌田共済会郷土博物館所蔵）、開発計画図である「西御国境鵜足郡ヨリ阿野郡北林田村綾川裾迄海辺測量分間絵図」（公益財団法人　鎌田共済会郷土博物館所蔵）、完成間近の様子を描いた「阿野郡北坂出浦沖林田村綾川之裾ヨリ御新開見込之地割分間絵図」（公益財団法人　鎌田共済会郷土博物館所蔵）に描かれている。

図 3　高松藩軍用絵図　阿野郡北絵図　公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館所蔵

図 4　坂出古図　公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館所蔵

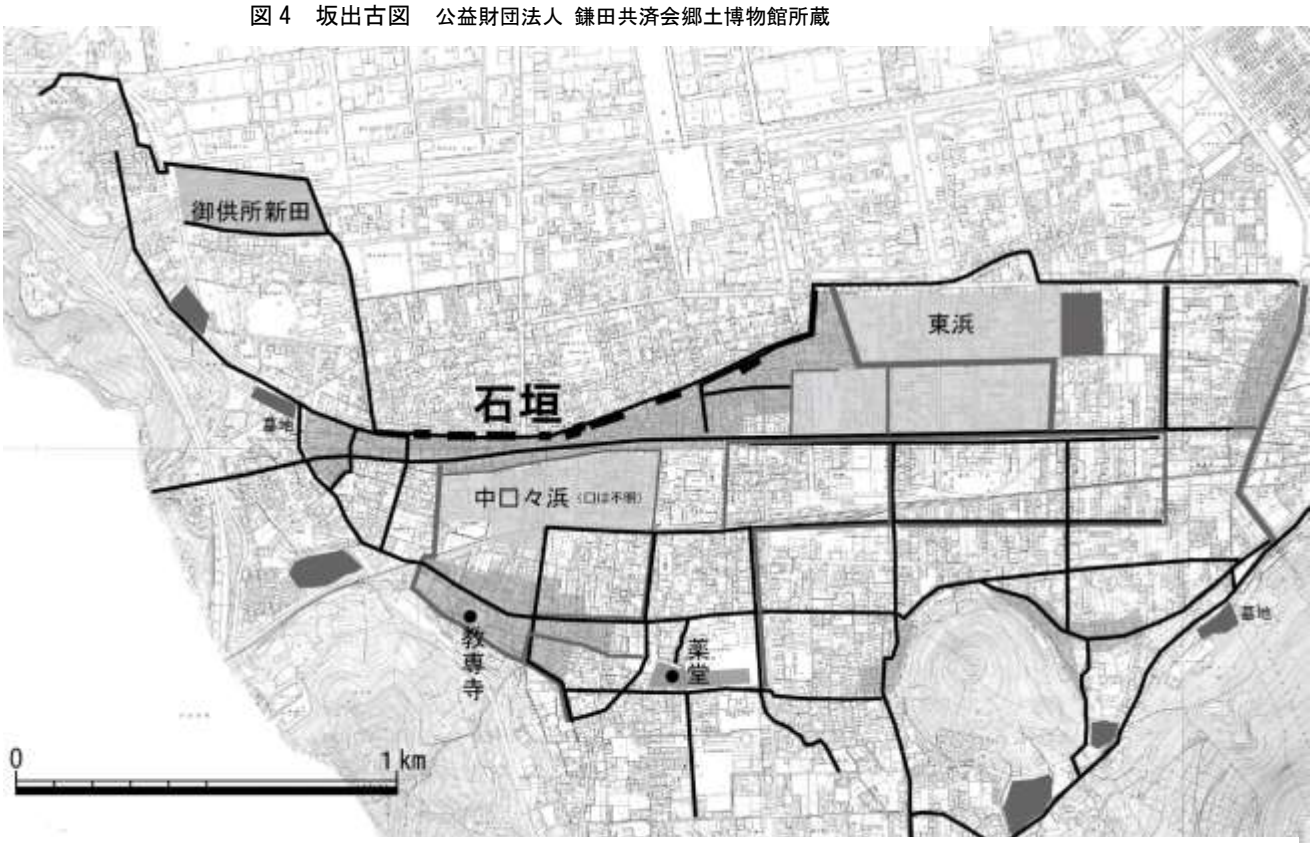

図 5　「坂出古図」に描かれた坂出市街地　坂出市都市計画図の一部に加筆

図 6　干拓以前の護岸と伝えられる石垣　坂出市寿町

図 7　石垣断面　本町 2 丁目遺跡　坂出市本町

これらの中でも最も詳細な絵図である『坂出古図』(図４）に描かれた海岸付近の様子を見てみよう。図 5 はこの古図に描かれた内容を坂出市都市計画図（平成 4 年作成）に加筆したものである。現代と比べると、かなり内陸まで海が入り込んでいる。古図には波線で直線的に海岸線が描かれている。古図の西部から見ていくと、この海岸線は「御供所新田」から南に向かい、ほぼ直角に曲がって北東に向かい、東に延びる。北に円弧状に突出するところは久米町一丁目にある鳥洲（潮止）神社のあるあたりである。現在、坂出市白金町・寿町・元町の一部では北の浜堤の北端に当たる場所に、通賢干拓以前の護岸と伝えられる東西方向の石垣があり、石垣の北と南では 0.5～1.0 メートルほどの高低差がある。古図に描かれた波線は護岸の石垣の表現であろう。石垣の施工時期に関する資料は見当たらないが、この石垣の西端に当たる西須賀八軒屋港に享保 17 年（1732)、船番所が移されていることから [5]、18 世紀にこの付近一帯の護岸が整備されたのであろう。

文政 9 年（1826）になると、高松藩の普請奉行である久米通賢が干拓に着手し、石垣の北側には広大な面積の塩田と畑が広がった。この様子は「坂出墾田図」（県立ミュージアム松平家歴史資料・坂出市所蔵）などに詳細に描かれている。

3. 江尻町付近

この付近の海辺の変遷を知る手がかりは少ない。絵図資料は 19 世紀初頭に描かれた「高松藩軍用絵図　阿野郡北絵図」（公益財団法人 鎌田共済会郷土博物館所蔵　図 3）があるだけである。小字と灌漑の状況などから海辺の開発を考えたい。

図 8 は江尻町付近の小字と現在の灌漑の状況を示す図である。江尻町の北部には「浜田」という小字がある。この付近は江尻町域の田畑を灌漑する江尻用水の末端であることから、江尻町の中でも最も遅く開発された可能性が高い。現在この付近の田畑の標高は 1～２ｍであることから、開発前は浜が広がっていたと推定される。

浜田」の南西には「北新開」・「南新開」がある。現在の坂出警察書付近である。その名から新たに開発した土地であることがわかる。現在、この付近の現地表は標高 1～2 メートルと低く、数本の水路を設けて西側の横津川に排水している。また、坂出警察新築工事の工事立会で表土の下には厚い砂層が堆積するのが確認された。この付近にはかつて海岸部の低湿地であったが、横津川や排水路を整備し、

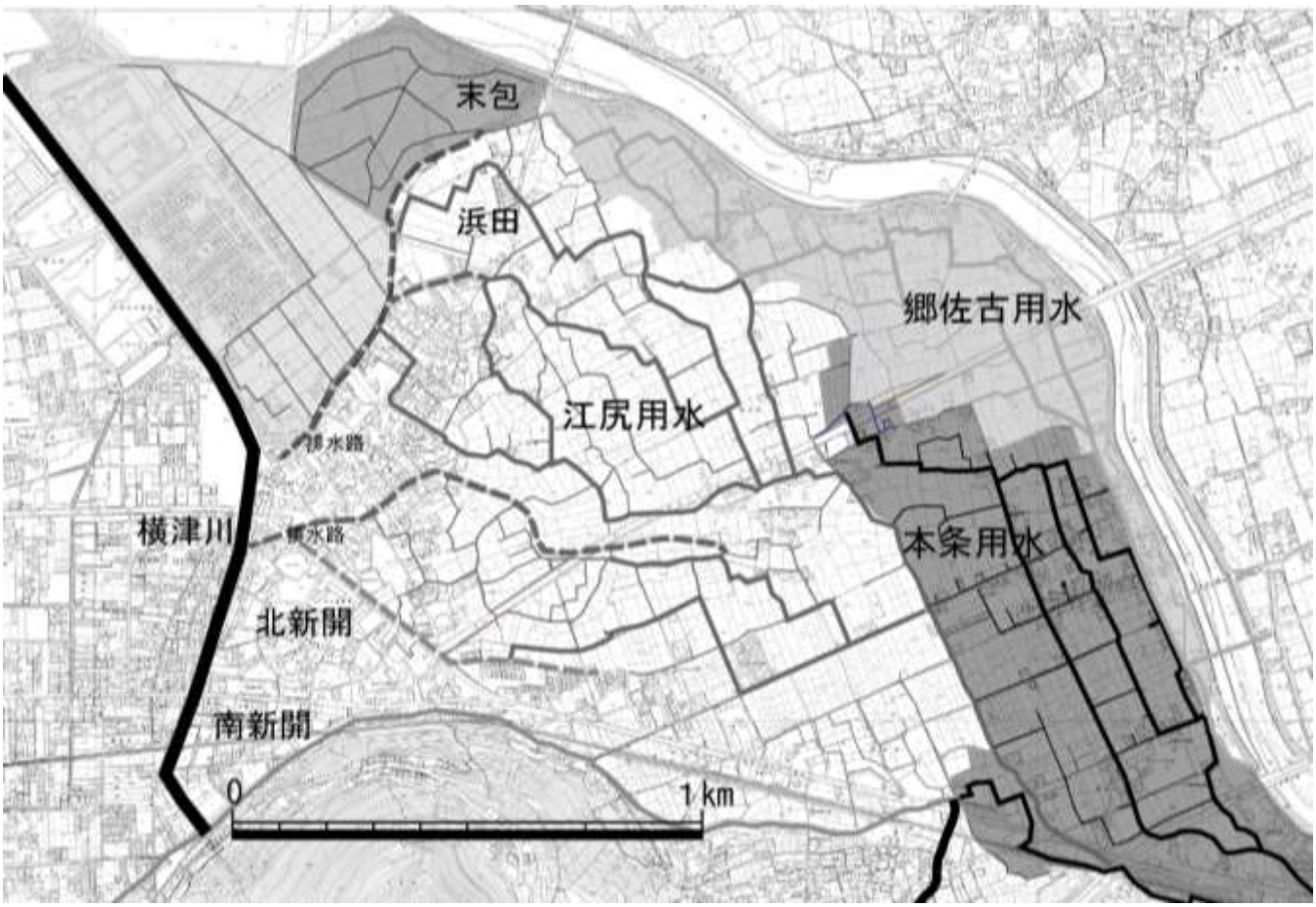

図８　江尻町の小字と現在の灌漑状況

坂出市都市計画図の一部に加筆

図 9　末包新開石仏

図 10　末包新開石仏 側面

「北新開」・「南新開」を開発したと考えられる。

文化元年（1804）には、江尻町の北東端で、綾川の河口沿いにある小字「末包」が開発された。現地の集落内に設置された石仏（図 9・10）には鵜足郡東分村（現在の香川県綾歌郡宇多津町東分）の末包元左衛門と和享によって同年に開発されたと刻まれている。

4. 林田町付近

林田町には文化年間（1804～1818）に作成され、明治時代初期に加筆された検地帳と、地券発行のために明治時代初期に作成された地引絵図が保管されていた。これらの資料から江戸時代末の田畑の呼び名を特定した[(6)]。

図 11 をみると、林田町の北部には「元禄六酉新興」・「延宝二寅新興」・「宝永元申新興」など年紀を記したものが集中している。「新興」は文字通り新たに興すことであり、田畑が開発されたことを示している。「新興」の田畑が広がる林田町北部でも北西部には綾川沿いに「安政二卯新興」・「明治四辛新興」がみられるものの、「延宝二寅新興」・「宝永元申新興」・「宝永六巳新興」などが広がる。また、中央部から北東部には「元禄六酉新興」が広範囲にみられることから、林田町の北部は 17 世紀末から 18 世紀前半に開発したことがうかがわれる。現在、これらの南には雌山の裾を取り巻くように西麓から北麓に向かって神谷川が流れている。雌山の西方には河川の痕跡とみられる地割が残ることから、本来は北に流れていた神谷川の流路を東に固定して、広大な田畑を開発した可能性が高い。

なお、これらの開発以前の様子を示す資料として幕府の海辺巡検使高林又兵衛の視察記である「海上湊記」[(7)] がある。この記録は寛文７年（1667）のもので、この中に「林田　拾軒　遠干潟也　舟掛り無是ヨリ白峯へ上ル一り程有　此ノ辺ノ浜ヲ綾ノ浜ト云」とあり、江戸時代中期以降、新たに開発されたところは遠干潟で、綾ノ浜と呼ばれていたことが記されている。

註

1『坂出市史』坂出市役所　1592

2　木下晴一『木太中村遺跡　文京町二丁目西遺跡』香川県埋蔵文化財センター　2009

3　森下友子『本町二丁目遺跡』香川県埋蔵文化財センター　2019

4　この図は聞き取りをもとに明治 45 年に描いたものであるが、先述の絵図と比べてもほとんど矛盾はないことから、信ぴょう性は非常に高いと考えられる。

5　1と同じ

6　森下友子「平成 23 年度の調査」『讃岐国府跡探索事業調査報告　平成 23・24 年度』香川県埋蔵文化財センター　2013

7　1と同じ

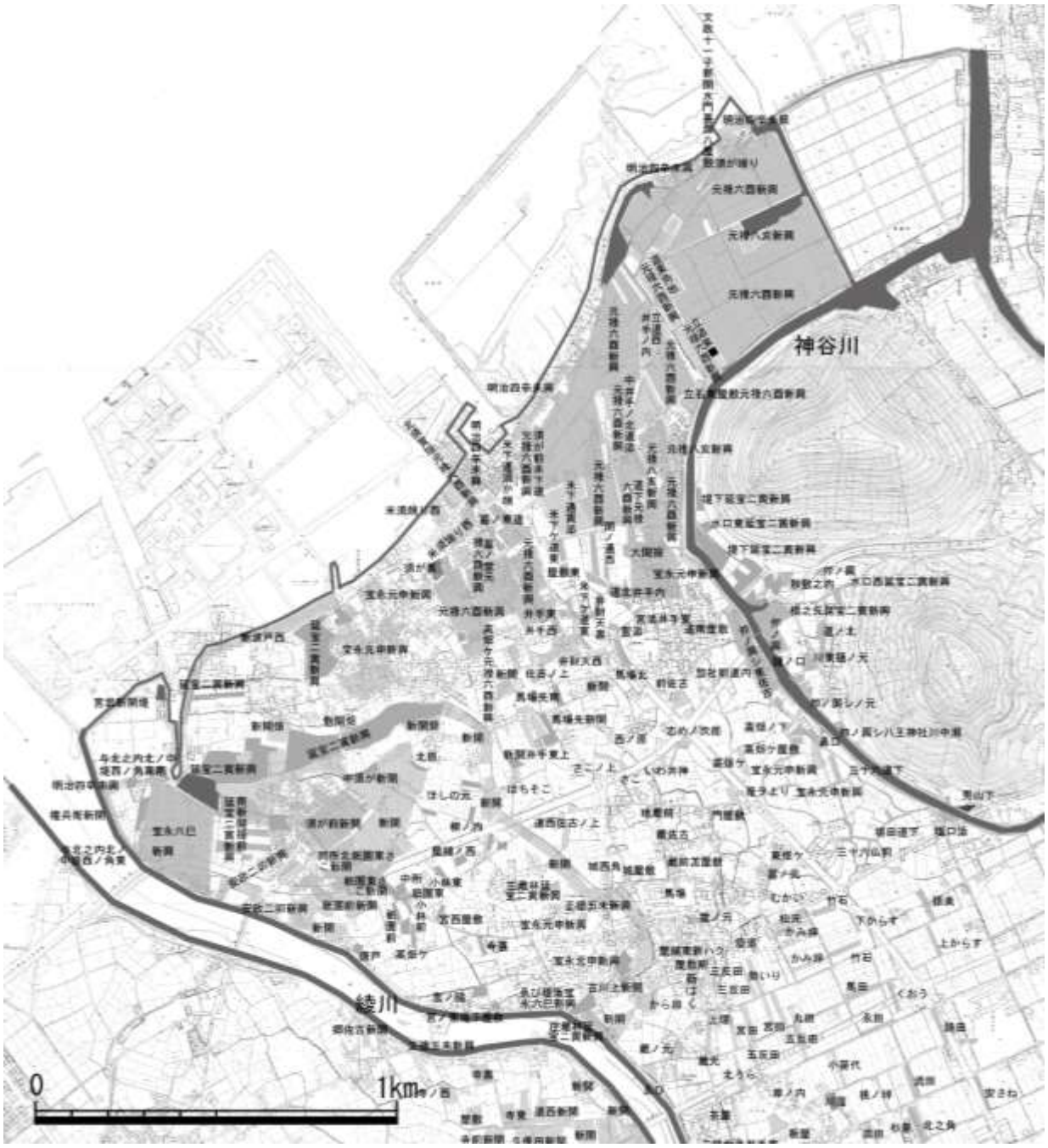

図 11　林田町の古地名

坂出市都市計画図の一部に加筆